FRONT
OF
VIEW

IT時代と老人

ライフデザイン研究所　所長
加藤 寛

最近では、携帯電話を語る上でしばしば耳にする言葉として「モバイル」という言葉が挙げられる。「モバイル」とは、もともと「可動性の、移動性の」という意味の英語であるが、簡単に持ち運びができて外出先でもつかえる通信機器・情報機器の総称として広く使われるようになってきている。

そして「モバイル」の最高傑作として今、世界から注目されているのが「iモード」である。いわゆるインターネット接続機能を持つ携帯電話のことである。この「iモード」サービス（NTTドコモ）は珍しさもあって急速に普及し、その後、「EZアクセス」（IDO）「Jスカイ」（J-PHONE）「EZウェブ」（DDI他）という同様のサービスも開始されたため、携帯電話によるインターネット利用者は1年ちょっとで1000万人を超えた。一方、アメリカではこういう携帯電話によるインターネットサービスがまだ普及しておらず、利用者は50万人程度である。ゆえに『iモードは日本独自のIT革命だ』といっても過言ではないだろう。iモードの成功については、海外でも注目が非常に高まっており、モバイル・インターネットのさきがけとして高く評価されているのである。かつてはあの有名なビル・ゲイツ氏でさえも語ったようにこれからのインターネット革命の主戦場としては、「無線インターネット」から「モバイル・インターネット」に移行しつつある。

この「iモード」は、日本という国の「個性」に徹したことから生まれた産物である。日本では、パソコンの値段が高い、使いにくい、置き場所がないという問題があった。だからその日本では、インターネットを使ったエレクトロニック・コマース（通称、電子商取引）が普及しないんじゃないのか？と思われがちであったが、「安くて、使いやすくて、場所も取らないインターネット端末」、すなわち「iモード」の出現によってそのイメージを打破したといえる。

ただし、携帯電話によるインターネット利用は万能ではない。パソコンではできない、モバイルならではの活用法がある

一方で、やはり画面サイズの限界、取り扱えるデータの限界などもある。現にNTTドコモでは取り寄せることができるのにJ-PHONEでは取り寄せることができないデータもある。ほかにもいろいろな問題がある。携帯電話にインターネットなどの機能が充実した半面、電話以外の操作が多くなった。取扱説明書も電話帳並みの厚さがあり、読みづらくもなった。若者は、適応するのは早いかもしれないが老人には少し苦痛を覚えるのではなかろうか。そういう点において「iモード」離れが徐々に増えていくと思われる。特にこれからの日本は、高齢化社会に向かうため、老人向けのインターネット接続機能付き携帯電話も開発してほしいものである。

デジタル・ディバイド（情報格差）ということが、IT化の影の部分としてよくいわれるようになったが、うれしいことに最近の調査では、高齢者の方が、若者よりITに関心をもっているらしい。もちろん、若者はすでに携帯電話でIT化を身辺に経験しているから当然と思っているのかもしれないし、高齢者は将来への不適合をおそれているから、知りたがっているのかもしれない。しかし日本の高齢者の関心が強いこともあるが、痴呆症老人にとっても貴重な道具となっている。靴の中に受信機をつけておけば、放浪していてもすぐ発見することができる。ラスベガスはいまやギャンブルの街ではなく、老人特に痴呆性老人にとって安心して楽しめる街に変わっているという。

こうした変化について日本ではまだまだ緻密な研究が少ない。本レポートの研究はそうした方向に筋道をつけてくれるにちがいない。